上岡弘二

「マフディー、来たりませ！」

イランで今最も人気のある人物は？　答えは十人十色。では、いちばん待望される人物は？

答えは一義的である。第一二代イマーム・マフディー（「（神により）導かれた者」）、別名「隠れイマーム」、「時の主」、そして「待望されるイマーム」。十二イマーム・シーア派を国教とする唯一の国がイランである。この派の最大の特質は、現し身に見ることのできないこのマフディーの存在。イランは「時のイマームの国」、「隠れイマームの国」である。

十二イマーム・シーア派の宗教行事はといえば、モハッラム月一〇日のアーシューラーに代表されるように、殉教を追悼する服喪の祭りが圧倒的である。例外は、預言者ムハンマドの生誕祭。スンナ派では最大に喜ばしいお祭り（第三月一二日）。イランでは同じ日ではなく、五日後の一七日である。もちろん国家休日だが、この祝祭はまったく盛り上がらない。官製マスコミだけが盛り上がって実に白々しい。図らずも、こんなところにスンナ派とシーア派の深い淵を垣間見ることができる。

イラン最大の宗教的祝祭は、シャアバーン月一五日のマフディーの生誕祭（二〇一〇年は七月二七日）。国家休日。街はこれでもかこれでもかの電飾で溢れ、あちこちに「マフディー、来たりませ！」のスローガン。一日は日没と共に始まる。陰暦一四日、満月が昇ってくる。イラン庶民の信仰を未来形で語るとき、もっとも必要な固有名詞がマフディー。彼はサーマッラーに生まれ、幼少のまま八七四年にサルダーブ（地下貯水槽）にその身を隠し、お隠れのまま現在に至っている。

この日は、マフディーの生誕日であると同時に、いみじくも「世界被抑圧者の日」と、革命後すぐに設定された。信者は、模式的に言えば、預言者の血統を引く宗教上の最高権威が政治権力の長でもあった初代イマーム・アリーの理想時代と、マフディーが再臨してこの世を統治する来るべき黄金時代の狭間の濁世を、今生きている。再臨を待望するのが教義上も信者の必須の要件。その世は理想世界というだけで、具体像は提示されていない。しかし、理想の絶対的君主と鼓腹撃壌の被支配者の図式で、民主化の理念に合致するものでないことは容易に予測できる。無謬のカリスマ的個人の存在を前提としない理想社会は、来るべきマフディーの世にこそありえない。

シーア派の伝承が「雲に隠れた太陽」にたとえるマフディーが再臨するまで、すべての権威・権力は真正ではない。また、マフディーは待望するものであって、自らの業で呼び寄せるものではない。あまたの聖者廟の繁栄ぶりが如実に示すように、庶民は他力本願。「去るものは去り、来るべきものは来る」。したたかな伝統的宿命論に強固に裏打ちされた、イラン庶民の集団記憶に通奏低音のように流れる、この超歴史的時間感覚にどう対処するのかは、その統治理念の根幹が今まさに危機に瀕している現体制にとっても、また、反体制側の民主化運動にとっても決してささいな問題ではない。

かみおか　こうじ／東京外国語大学名誉教授
イラン言語学。言語調査の他に、ブルガリアのアレヴィー派・パキスタンのイスマーイール派を含むシーア派の民間信仰の現地調査を行う。現在、パミール諸語ワヒー語の調査を続行中。